

平泉

先日、平泉中尊寺に行く機会がありました。仙台に住んでいる娘夫婦が我々老夫婦を引っ張り出してくれたお陰で、かれこれ40年ぶりに平泉を訪れることが出来ました。

もっとも、かつて訪れた事があるとはいっても余りにも古いこと故、草深く、鄙びた印象しか残っていない、特に金色堂については、その光り輝く姿ではなく、むしろ、蓋堂の風雪に洗われた姿の方が記憶に残っているという状態でした。

平泉中尊寺を訪れた日は、じりじりするような暑い日でしたが、月見坂を進むに従い、左右には鬱蒼とした林が広がっており、涼しげに感じます。道の両脇には、本堂の他八幡堂、弁慶堂、薬師堂、地藏堂、大日堂など大小のお堂があり、金色堂に向かう人は、道すがらお参りをしながら進む事になります。

平泉は、1094年以降、約100年間にわたって、奥州藤原氏4代（清衡、基衡、秀衡、泰衡）の拠点となった地であり、そこには加羅御所の他中尊寺、毛越寺、無量光院など数多くの寺院が建立されるなど、王朝風の華やかな文化が栄えました。

吾妻鏡の文治5年（1189年）9月17日の記事には、中尊寺の規模について、寺塔が40余り、禅房が300余り、その他、多宝寺、釈迦堂、金色堂、宋国の一切経を収めた経蔵などが立ち並んでいたことが記されていますので、如何にその規模は大きく、また華やかであったかが想像されます。

このように、栄耀栄華を誇った奥州藤原氏ですが、1189年に源頼朝によって攻められ、遂に族滅すると平泉も荒れ果て、今では、中尊寺金色堂や毛越寺庭園などが僅かに往時の面影を残すのみとなっています。

「月日は百代の過客にして、行きかう年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老いをむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂白の思ひやまず（日本古典文学大系-芭蕉文集）」

これは、松尾芭蕉の手による「奥の細道」の冒頭の一節ですが、この紀行文の中で芭蕉は、「三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀

衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。(中略) 偕(さて)も義臣すぐって此城にこもり、功名一時の叢(くさむら)となる。国破れて山河あり、城春にして草青みたり、と笠打敷て、時のうつるまで泪を落とし侍りぬ。」と書き記して、中尊寺の荒廃ぶりを嘆き

夏草や兵どもが夢の跡

という有名な一句を遺しています。

この中尊寺を含む建築、庭園及び考古学的遺跡群「平泉の文化遺産」は、仏国土(浄土)思想を表すものとして評価され、平成23年(2011年)世界文化遺産に登録されていますが、中でも金色堂は「平泉の文化遺産」の中心的な建造物といえます。

この金色堂は、天治元年(1124年)藤原清衡の発願により建立されたもので、中尊寺創建当初の姿を保っています。

また、金色堂は1965年に再建された頑丈な覆堂によって風雪から守られています。この覆堂に入ると、屋根瓦を除いて壁や床等が皆金箔で覆われているお堂が目飛び込んできます。

そしてお堂の内部は、須(しゅ)弥壇(みだん)や4本の柱に施された螺鈿細工と相まって、浄土の姿もかくやと思わせる程の見事さで、平安時代の工芸技術の粋を集めたといっても過言ではありません。それだけ奥州藤原氏の財力や権力の力は大きかったという事です。

芭蕉は、金色堂を訪れた時、「七宝散りうせて、珠の扉風にやぶれ、金(こがね)の柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の叢と成るべきを、四面新たに囲て、薨を覆て風雨を凌。暫く千歳(せんざい)の記念(かたみ)とはなれり(日本古典文学大系一芭蕉文集)。」と述べており、既に、金色堂が覆堂で風雪から保護されていることを示しています。

五月雨の降りのこしてや光堂

この句は、「物皆腐らすという五月雨も、ここばかりは降り残しているかのごとく、数百年来の風雨を凌いで来て、光堂は燦然と輝いているよ(芭蕉文集から)」という意味です。

まさに金色堂は、900年以上も昔の奥州藤原氏の栄枯盛衰を今に伝えています。そして、覆堂によって金色堂の輝きを守り続けてきた人間の知恵と努力に、改めて感謝しなければならないと感じたところです。(塾頭 吉田 洋一)